

キミの笑顔

秋元絵梨

栃木県・14歳・中学生

あの頃の私は本当に荒れていた。精神がボロボロで、穴が開いているみたいに痛かった。

夜、一人で布団の中にもって泣いた。声も出なくて、ただ涙だけが流れてて、ひどくつらくて痛かった。

そんな毎日がめぐってくることさえも呪わしくて、本気で壊したいと願ったこともある。そんなことできるわけがない、ということもわかっていた。

そんな自分が嫌で、憎らしくて、死んでしまった方が絶対に楽だと思い込んでいた。そんなバカな私に声をかけてくれたのがキミだった。

キミはボロきれみたいな私を見て笑った。憎らしくなるくらい爽やかに、快活に笑ったんだ。

笑顔を「作る」だけだった私には、それが羨ましかった。

「笑顔」を忘れていた私には、そんなことができるはずなかったから。

「死ぬとか言うな。お前死んだら、俺は泣くぞ。いいな!?」泣くぞ!?

励ましとか慰めなどではまったくないキミの言葉がうれしかった。いや、おかしかった、の方が正しいかもしれない。久し

ぶりに笑った。

心の底から笑った私に、キミは自分の胸を貸してくれた。私は泣いた。赤ん坊にかえったみたいに泣いた。

ただただ泣いて、ずっと頭に置いておいてくれたキミの手にも気づかないままだった。

温かかったのか、冷たかったのかなんて覚えてないし、心地よかったと思った覚えもないけれど、まだまだ未発達だったキミの手を、私は好きになったんだ。

あの頃はまだ、恋愛感情とか、そういう類のものは持っていなかった。もっと純粹で素朴なものだったと思う。

それでも、キミのことは誰よりも好きで、今キミが私の前か

らいなくなれば、きっと足を地面につけたままなんて生きられない。

だから、ずっとずっと、私のそばにいて下さい。

私の横で、憎々しいくらいキレイに笑っていて。それだけで私は頑張れるから。だから……。

※死ぬほど自分が嫌いで、何もかもが癪にさわっていた頃のこと。